

夔州における杜甫の雨の詩

竹村, 則行
九州大学 : 名誉教授

<https://doi.org/10.15017/7405115>

出版情報 : 中国文学論集. 54, pp.1-14, 2025-12-25. The Chinese Literature Association, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



夔州における杜甫の雨の詩

竹村 則行

一 はじめに

七五九（乾元二）年春、四十八歳の杜甫は、生涯最後で最大の決心を下し、家族帯同で故郷の洛陽に別れを告げ、帰郷の意志こそ終生棄てなかつたものの、確かな生活保証の無いまま漂浪の旅に出発する。時に、肅宗治下に任じた拾遺職も逐われ、加えて、当時折悪しく中原地方を襲った深刻な大飢饉の問題に直面していた杜甫がやむなく選択した、一族生存の為の最終窮余策であった。

近年の杜甫評伝研究書である孫微・張学芬『杜甫傳^①』はこの間の事情を次のように述べる。

總之、戦亂和饑荒的威脅、生活的困餒無助、對昏君的反感與絶望、最終促使杜甫下定決心辭去華州司功參軍這个官職、遠離關輔地區、遠離飢荒和戰爭中心、他徹底遠離肅宗和朝廷。他帶領全家老小遠赴秦州投親靠友、從此走上了一條更加艱辛坎坷之路。

（これを要するに、戦亂や飢饉の脅威、生活の困窮と孤立、絶望、これが最終的に杜甫をして華州司功參軍という地方廉官を辞退して、近畿を遠く離れ、飢饉と戦争の中心地から遠ざかることにさせた。杜甫は肅宗や朝廷から徹底して距離を置いたのである。彼は老人から若者に至る家族を引き連れ、秦州の親戚友人を頼って行くことにした。こうして、杜甫は更に苦難に満ちた悪路を行くことになったのである。）

夔州における杜甫の雨の詩

これはまた、何とも悲壯で絶望的な旅路の出発であったことだろう。同様の旅路を余儀なくされた当時の士人は、杜甫以外にも多数いたと考えられるが、加えて、杜甫自身には深刻な健康上の問題もあった。伝統ある杜一族の家長として家名の復興に懸命に尽力した杜甫ではあったが、万策尽き、自身の存在の最大の根拠地である故郷までをも後にして漂浪の旅に出立した苦衷の心境は、他人には想像を絶するが、漂浪が凄絶であればあるほど、杜甫が旅中で困苦を赤裸々に認めた詩篇は、後日名篇としての評価を得ることになる。皮肉なことに、周知のように、実はその杜甫が漂浪の途次において、極限の困苦を嘗めつつ紡ぎ出した珠玉の詩篇の数々は、今日における中国文学史上の貴重な文化遺産として今日に賞賛して伝えられる。杜甫が若し王維の如く順調な官吏出世道を進んでいたら、盛唐詩壇の様相はかなり違ったものになっていたであろう。拙筆は意を尽くさないが、以後の論述の為に、続いて関連する杜甫の苦難の漂浪の旅路の概要を予め確認しておく。

※ 七五九（乾元二年春、四十八歳。華州司功参军の廉官を棄て、洛陽を出発。隴右秦州に赴く。

※ 同年十月、秦州より同谷に移る。十二月、四川成都に到着。劍南節度使裴冕の援助で浣花草堂を得る。

※ 七六〇（乾元三／上元元年、四十九歳。成都に在り。

※ 七六一（上元二年、五十歳。十二月、杜甫最大の支援者となる嚴武が、成都尹・劍南節度使として成都に着任。

※ 七六二（上元三／宝應元年、五十一歳。七月、長安に召し返された嚴武を見送って綿州まで同行。上司不在の成都では成都少尹の徐知道が反乱を起こし、杜甫は成都に戻れず梓州に滞在する。

※ 七六四（広徳二年、五十三歳。二月、旧知の嚴武の成都再任を聞き、直前に開始していた歸郷のための東行を変更して、三月、成都に戻る。これにより、杜甫と嚴武の再会がかない、成都尹・劍南節度使たる嚴武の推薦による工部員外郎への就職が実現して、杜甫には生涯稀有の安定した日々が訪れたが、間もなく嚴武の死（七六五年四月）により、消滅する。この事件により、杜甫の洛陽歸郷は絶望的となった。

※ 七六五（永泰元年、五十四歳。四月、嚴武急死、四十歳。格別の庇護を受けていた杜甫も、五月、成都を後にする。秋、四川忠州。九月、雲安に到着。

※ 七六六（永泰二／大曆元年、五十五歳。春、雲安に在り。三月、夔州に移住。秋、西閣（白帝城の一角）に移る。夔州都督柏茂琳の厚遇を受ける。

※ 七六七（大曆二年、五十六歳。夔州に在り。三月、瀘西に居を移す。柏茂琳より田畑を譲り受け、農業を営む。柏茂琳急死。

※ 七六八（大曆三年、五十七歳。三月、夔州を去り、三峡を経て、五月、湖北江陵（荊州）に至る。秋、湖南公安に至る。年末、湖南岳州に至る。

※ 七六九（大曆四年、五十八歳。湖南を放浪。洞庭湖／＼湘水／＼潭州／＼衡州／＼潭州。旧知の韋之晋を頼つて行くが、間もなくその死を知る。

※ 七七〇（大曆五年、五十九歳。湖南潭州を放浪。湖南耒陽にて洪水避難中に客死する。

小稿は、杜甫が生涯を賭した漂浪の旅の途次、特に四川夔州において集中的に詠んだ雨の詩について、その描写、心理、杜甫詩や文学史上における位置、特色等について、基礎的な分析を試みたい。

二 夔州における杜甫の雨の詩

杜甫は、七六六年十二月から七六八年三月に至る二年余りを四川夔州において過ごした。その間、一度西閣から瀘西へ長江沿いに移居している。その間の詩作は清・仇兆鰲『杜詩詳注』巻十五～二十一に集中して纏められる。それによれば、詩題に「雨」を含む詩の数は全六十四首。とりわけ巻十五においては、全七十八首中、以下小稿において考察する十二首の詩題に「雨」を含む。以下に詩題と詩番号、冒頭一句を提示する（各詩の表現は各項中に検討する。底本は講談社学術文庫『杜甫全詩訳注』）。

① 雨（〇九一五） 峽雲行清曉

② 雨（〇九一六） 行雲遞崇高

夔州における杜甫の雨の詩

- ③ 雨二首其一（〇九一七） 青山澹無姿
④ 同其二（〇九一八） 空山中宵陰
⑤ 江上（〇九一九） 江上日多雨
⑥ 雨晴（〇九二〇） 雨時山不改
⑦ 雨不絶（〇九二一） 鳴雨既過漸細微
⑧ 晚晴（〇九二二） 返照斜初徹
⑨ 雨（〇九二三） 万木雲深隱
⑩ 晴二首其一（〇九二四） 久雨巫山暗
⑪ 同其二（〇九二五） 啼鳥争引子
⑫ 雨（〇九二八） 始賀天休雨

三 懷王と神女の雲雨故事

杜甫が夔州において、詩題に「雨」字を付して直接に雨を詠んだ詩篇は以上の十二首である。無論氣候現象としての降雨は気温や湿度等の条件が整えば常に発生するものだが、それにしても杜甫の夔州滞在二年ばかりの間の作詩は、その他の詩材に比して異常に集中して多い。以下には、上記十二首詩を中心に、その内容を、雲雨故事の雨、万物成長の喜びの雨、定点観測による降雨描写等の観点から分類して大まかな分析を試みたい。

まず、三峡夔州に滞在する杜甫が当地の旅客として詠んだ雨の詩には、楚の懷王と巫山神女の間に関わされた所謂雲雨故事^④が多く引用または言及される。故事の作者たる宋玉と「高唐賦」「神女賦」について、杜甫が熟知していたことは確かだが、当時の宮殿は既に滅んでいたと思われる。杜甫詩の巫山神女への言及は神話伝説であり、杜甫はこれを現実の事象と峻別する。即ち、神話の存在は認識して詩中に点綴するが、夔州の降雨の現実と混同することはない^⑤。例えば、杜甫は、前掲①「雨（〇九一五 峽雲行清曉）」詩において、夔州における驟雨の様子を描写した後、後半の六句において、次のように宋玉「高唐賦」中に記された楚懷王と巫山神女との雲雨故事に言及する。

楚宮久已滅 楚宮 久しく已に滅し

幽珮為誰哀 幽珮 誰が為に哀しむ

侍臣書王夢 侍臣 王が夢を書し

賦有冠古才 賦に 古に冠たる才有り

冥冥翠龍駕 冥冥たり 翠龍の駕

多自巫山台 多くは巫山の台よりならん

「侍臣」は楚懷王の侍臣宋玉、「賦」は「高唐賦」。杜甫はここで、眼前の夔州の驟雨を描写した後、当地に伝わる楚懷王と巫山仙女との有名な雲雨故事に言及し、その驟雨の様から、懷王の軍隊の勇ましい進軍を連想する。ただこれは従来の形式的な引用である事は、杜甫の次の詩がこれを物語る。

⑫雨（〇九二八 始賀天休雨）

牛馬行無色 牛馬は 行くも色無く

蛟龍闕不開 蛟龍は 闕ひて開れず

干戈盛陰氣 干戈 陰気盛んなるは

未必自陽台 未だ必ずしも陽台よりせず

杜甫は、当該詩後半の引用部分において、世上の「暴雨＝戦乱」が続くのは「干戈」（武器）の使用の為であり、巫山の雲雨の如きものではない事を喝破する（因みに武器の武字は武力行使抑止の意）。以上から、杜甫が夔州の豪雨から当地の雲雨故事を連想したとしても、杜甫自身は神話故事と現実の気候現象とを冷静に峻別していたことが判明する。驟雨の所謂「雨脚」から軍隊の歩兵の行進を連想することは、その場において実際に驟雨に打たれた杜甫ならではの発想であると筆者は考える。

四 万物を成長させる喜びの雨

次に、降雨の肯定的な側面、則ち慈雨的な面を詠んだ杜甫詩について検討する。乾元元年（七五八）、玄宗の帝位を継いだ肅宗下の長安で、左拾遺の任を拝命した時の作。夔州時の作ではなく、また玄宗から肅宗への鼎革の乱中であるが、雨の持つ万物慈雨的な側面がよく表現されており、夔州時の雨の詩とは好対照の詩例である。

曲江対雨

曲江にて雨に対す（〇二一〇）

城上春雲覆苑牆	城上の春雲 苑牆を覆ひ
江亭晚色静年芳	江亭の晩色 年芳静かなり
林芳著雨燕支湿	林芳 雨を著けて 燕支 <small>うさ</small> 湿 <small>ぬ</small> おひ
水荇牽風翠帶長	水荇 風に牽かれて 翠帶長し
龍武新軍深駐輦	龍武の新軍 深く輦を駐め
芙蓉別殿漫焚香	芙蓉の別殿 漫りに香を焚く
何時詔此金錢会	何れの時か 此の金錢の会を詔して
暫醉佳人錦瑟傍	暫く酔はん 佳人錦瑟の傍

これは目出度い春色の風景である。宮庭に並べられた花々は天下万物が春雨に潤っている。表現は華美であるが、果たして本当にそのような風景だったのだろうか。杜甫詩において、このような一方的な贊美詩は寧ろ珍しいが、これは、安祿山乱による政乱と肅宗の新王朝がもたらした一時的な平和であった。発言は慎重にすべきであるが、もし杜甫が此の後に平穩な出世官僚の道を進んだならば、今日の杜甫の名作詩篇の大部分は存在せず、代わりに「目出度い」愛国詩人が盛唐の詩壇を席捲したことだろう。

喜雨

喜びの雨（〇八二六）

南国旱無雨

南国は早にして雨無きに

今朝江出雲

今朝 江 雲を出す

入空纒漠漠

空に入りて 纒わたりかに漠漠たり

灑迴已紛紛

廻はるかに灑そそぎて 已に紛紛たり

巢燕高飛尽

巢燕は高く飛びて尽き

林花潤色分

林花は潤おひて色を分かつ

晚来声不絶

晚来 声絶えず

応得夜深聞

応に夜深けて聞くを得べし

早魘の影響で長安洛陽を後にして、陝西甘肅の乾燥地帯を踏破してきた杜甫一行は、永泰元年（七六五）、四川成都でやっと本格的な驟雨の洗礼を受ける。第二句以下に、その喜びが克明に描写される。「今朝江上に雲が出るとまもなく空高く立ちこめ、遠くまで絶え間なく降り注ぐ。樹上の鳥は高く飛んで居なくなり、雨に打たれた花は鮮やかな色をなす。雨は夜になっても止まず、深夜も雨音が続くだろう。」

この他、②雨（〇九一六 行雲遞崇高）詩の後半第九、二十句には、

前雨傷卒暴

前の雨は卒暴なりしを傷み

今雨喜容易

今の雨は容易なるを喜ぶ

不可無雷霆

無かる可からず 雷霆の

間作鼓増気

間々に鼓を作し氣を増さんことを

佳声達中宵

佳声 中宵に達し

所望時一致

望む所 時に一致せり

夔州における杜甫の雨の詩

清霜九月天 清霜 九月の天

髣髴見滞穗 髣髴として滞穗を見る

郊扉及我私 郊扉より我が私に及び

我圃日蒼翠 我が圃は日々に蒼翠たり

恨無抱甕力 甕を抱く力の無きを恨み

庶減臨江費 江に臨む費を減ぜんことを庶こいねがう

と述べ、豊富な降雨のお蔭で、杜甫が借りていた畑の作物の成長が程よく促進されたこと、水やりの苦勞が軽減されることを望んでいる。中原の乾燥地帯に馴染んだ杜甫には、文字通りの実感であった。

同様の記述は、引用は省略するが、「蒿菑を種う」(〇九三三。わきよはチシヤ)にも見える。

五 夔州の驟雨を定点観測し、現象をリアルに表現した

小稿は、いよいよ本論に入る。杜甫が二年余りの夔州滞在中に集中して詠んだ雨の詩は、例えるならば夔州に定点を置いて、自らが豪雨に打たれながら驟雨の実態を観測した気象報告としての価値を有するであろう。その実態表現こそが、後世杜甫が六朝貴族文学の旧弊を脱して、新たな唐代文学の境界を開拓したと評価される所以と同一の内容を含むものと筆者は考える。まず、その新奇な表現について検討したい。

②雨(〇九一六)

行雲遞嵩高 行雲 遞たがひに崇高となり

飛雨靄而至 飛雨 靄として至る

潺湲石間溜
潺湲として石間に溜まり
汨汨松上駛
汨汨として松上に駛し

この一節は、ある日（恐らくは夏日）の夔州において、杜甫の住んでいた部屋の窓から見た驟雨の形成と展開の雨模様を時々刻々克明に描写する。内容から、どうやら杜甫はこの驟雨が發生して、その雨脚が杜甫の住居へ襲来するまで、所謂定点観測していたものと筆者は考える。以下訳文を以て説明に代える。「夔州の山々を流れゆく雲が互いに連なつて空高く昇り、やがて雨となつて舞い、靄が掛かつたような驟雨となつてこちらへやつて来る。それは、勢いよく庭の石のすき間に溜まり、松葉をピンピンと跳ねる。」

③雨二首其一（〇九一七）

青山澹無姿
青山澹くして 姿無く
白露誰能數
白露 誰か能く數へん
片片水上雲
片片たり 水上の雲
蕭蕭沙中雨
蕭蕭たり 沙中の雨
殊俗狀巢居
殊俗 巢居の狀く
層台俯風渚
層台に 風渚俯す
佳客適万里
佳客 万里に適く
沈思情延行
沈思して 情 延行す

（大意）豪雨が続く山々は淡く霞んで青天の青さは無く、白露のように降る雹を誰が数え上げられるだろう。川面には水蒸気となった雲が舞い散り、川辺にしとしと降り注いでいる。

この詩は、長江河畔の杜甫の住居上から見た雨靄に煙る夔州長江の点景と解する。雨の振り出しから止むまで数

夔州における杜甫の雨の詩

時間、更には次の降雨をも含め、眼下の長江を俯瞰して黙想する杜甫の姿が筆者には眼に映る。なお、末尾の「佳客」は一般の点景であり、杜甫との関係は薄いであろう。

④雨二首其二(〇九一八)

空山中宵陰 空山 中宵陰り

微冷先枕席 微冷 枕席を先にす

回風起清曙 回風 清曙に起こり

万象萋已碧 万象 萋として已に碧なり

落落出岫雲 落落たり 岫を出づる雲

渾渾倚天石 渾渾たり 天に倚る石

日仮何道行 日は何れの道を仮りて行かん

雨含長江白 雨は長江を含みて白し

(後略)

(大意)微かな夔州の山々が夜半には曇り、まず微かな冷気が枕元を訪れる。明け方にはひんやりしたつむじ風が起こり、見渡す限り青々と茂った万物の中を吹き抜ける。雲は山中の岩場から勃然と湧き出し、それはまるで大空に倚り掛かる巨岩のようだ。一体太陽はどの道を通って運行しているのか。雨は長江を白く覆って振り続けている。この詩において、杜甫は夔州に降り注ぐ驟雨の顛末を克明に描写する。その描写は具体的で実象的である。杜甫が想像でなく、実際に驟雨の様を体験しつつ、此の詩を作成したことを意味するであろう。

⑤江上(〇九一九)

江上日多雨 江上 日に雨多し

蕭蕭荆楚秋 蕭蕭たり 荆楚の秋
高風下木葉 高風は木葉を下し
永夜攬貂裘 永き夜に 貂裘を攬る
勳業頻看鏡 勳業 頻りに鏡を看
行藏独倚楼 行藏 独り楼に倚る
時危思報主 時危うくして 主に報ひんことを思ふも
衰謝不能休 衰謝すること休む能はず

詩題に「雨」は無いが、大暦元(七六六)年秋、夔州の長江沿いに立つ西閣において、降りしきる雨音を聴きながら、人生の「行藏」について思念した詩である。杜甫自身に報国の思いは十分あっても、乱世にあって、加えて我が衰貌のため、その悲願が実現することは絶望的であった。
また次の詩は『杜詩詳注』卷十八所収のものだが、卷十五の①②に準じる雨の作品である。

晨雨(一一一四)

小雨晨光内 小雨 晨光の内
初来葉上聞 初めて来たりて 葉上に聞く
霧交纒灑地 霧に交わりて 纒かに地に灑ぎ
風折旋随雲 風に折られて 旋ち雲に随う
暫起柴荆色 暫く起こす 柴荆の色
轻霑鳥獸群 軽く霑す 鳥獸の群れ
麝香山一半 麝香は 山一半
亭午未全分 亭午に 未だ全くは分かれず

夔州における杜甫の雨の詩

大曆二年（七六七）、夔州の作。ここでの雨も、時々刻々変化する降雨の実態を、一日の流れに沿って活写する。（大意）夜明け前に降り始めた雨が、初め近くの木の葉に雨音が聞こえていたが、やがて霧に交じって地に注ぎ、強風に吹かれて旋風となって雲を従えて大空を行く。その雨は我が家の色合いをも少しく変化させ、向こうの麝香山も霞んで見分けがつかない程である。

六 まとめ

上元二年（七六一）、漂浪の旅の途中、四川成都に滞在した五十歳の杜甫は、草堂の眼前を流れる錦江が春の出水で海波のように勢いよく波立っているのを実見し、我が青年期の文学活動を回顧しつつ、次のように述べる。

江上值水如海勢聊短述（江上、水の海勢の如くなるに値ひ、聊か短述す）（〇四六一）

為人性癖耽佳句 人と為り 性癖にして 佳句に耽り
語不驚人死不休 語の人を驚かさずんば 死すとも休まず
老去詩篇渾漫与 老い去りて 詩篇 渾すべて漫りに与へ
春来花鳥莫深愁 春来たりて 花鳥 深く愁う莫し
新添水檻供垂釣 新たに水檻を添えて 釣りを垂るるに供し
故著浮槎替入舟 故きに浮槎を著けて 舟を入るるに替ふ
焉得思如陶謝手 焉んぞ思ひ陶・謝の如き手を得て
令渠述作与同遊 渠をして述作せしめて 与に同遊せん

杜甫はここで、成都の草堂前を流れる錦江の狂瀾を眼前にして、自分の若かりし頃、恐らく科挙合格と任官に懸命になっていた二十代頃の自分の詩文活動を連想している。「人があつと驚くような警拔な表現の発掘に躍起になつ

ていた」(第二句) 杜甫の「性癖」は、五十歳を迎えた今も健在であり、前朝の「陶淵明・謝惠連」のような好敵手の出現を期待している。無論、就職活動を含む文学活動と、春期の出水とは直接関係は無いが、文学史上において主流反主流等、その流れを河水の流れに例えることは通常である。詠詩の対象は異なるが、杜甫が夔州において連綿として雨の詩を書いた事情も、この「語不驚人死不休」たる「性癖」に深く関わっていると筆者は見たい。即ち、前の第五章で検討した杜甫の夔州における驟雨を詠んだ詩もその対象に含まれ得ると筆者は考える。

この詩は上元二年(七六二)春、成都での作。杜甫五十歳。時に劍南節度使裴冕の援助によって成都の西郊に浣花草堂を得て、たまさかの余裕ある生活を営んでいた。後半の「檻・垂・釣・舟」はその象徴である。「江」は草堂近くを流れる長江の支流の錦江。この詩は、春期に増量した江水に遭遇した杜甫が、若き日の自分の詩作活動を勢よく流れる江水に例えて回顧したものである。末聯の陶淵明や謝靈運が、杜甫が理想とした文人であることは言うまでもない。起聯において、杜甫はこれまでの自分の性癖や文学活動を「本来偏屈で、良い句を作ることには夢中になり、従来無かった、人が驚く表現を見つかるまで詩作を止めなかった」と回顧する。杜甫が四川夔州において、場所は異なるが同じ長江を眼前にして、現実に降る雨の詩を多作するのは、これから五年後の事である。

しかし、昔の若年期の杜甫と今の老年期の杜甫の詩作への情熱には、大きな違いがある。それは、就職活動を兼ねた若年期の詩作と、厭くまで詩的表現に拘った老年期の杜甫の詩作となつて顕現する。

夔州における杜甫は、帰郷の意志こそ失わなかったものの、間違ひなく旅の終焉前の自分の客死を現実のものとして認識していた。連日多雨が続く夔州であったが、そもそも漂泊の原因に洛陽・長安の大飢饉の経験を持つ杜甫にとって、降雨は万物成長の源たる貴事ではあつても、憎悪の対象ではなかった。このような背景下に、杜甫の夔州における杜甫の雨の詩が、まるで驟雨の発生と展開を定点観測するかのように、連続して詩作されたものと筆者は考えるのである。

夔州における杜甫詩に特定した研究は多くないが、その中で封野『杜甫夔州詩疏論』⁽⁸⁾は次の様に述べる。浅学の筆者も基本的に同意見であり、貴重な先行研究の結論を借りて拙稿の総括とする。

杜甫喜愛夔州的自然生態，熱情贊美夔州「形勝有餘」，生動描繪夔州的萬千氣象。他把夔州的自然生態同人文積淀密切結合起來，把外在的自然客體同自己的情感意緒結合起來，創作出一幅幅既獨具夔州特色又包蘊人文精神的山水詩卷。

（杜甫は夔州の自然生態を愛し、夔州の「有り余る自然形態」を情熱的に贊美し、夔州の幾千幾万の氣象を描き出した。彼は夔州の自然形態を人文社会の淀みと密接に結合し、外在する自然客體を我が情感や情意と結合し、一幅の独自の特色を持ち、人文精神に富む山水詩卷を創作した。）

注

- (1) 天地出版社、二〇二〇年十月。一六四頁。
- (2) 杜甫の持病について、二宮俊博『津阪東陽「杜律詳解」全釈』二宮印刷工房、二〇二三年十一月。中冊二五八～二五九頁参照。
- (3) 黒川洋一「杜甫」下（岩波書店、『中国詩人選集』一〇、一九五九年）、および古川末喜「杜甫年譜」（下定雅弘・松原朗『杜甫全詩訳注』四、講談社学術文庫、二〇一六年十月）を参照。
- (4) 宋玉「高唐賦、神女賦」、『文選』卷十九所収。
- (5) 杜甫が夔州の古跡を詠んだ「詠懷古跡五首」（〇九九三～〇九九七）については、拙稿「異郷と帰郷」（『中国文学論纂』上巻、花書院、二〇二一年）参照。
- (6) 山中にある杜甫の畑に、毎日長江の川底まで水を汲みに行く労苦と解した。
- (7) 陶淵明と謝惠連を指すとするのは、仇兆鰲『杜詩詳注』卷十、および講談社学術文庫『杜甫全詩訳注』二（執筆は佐竹保子）。一説に「謝」は謝靈運。
- (8) 東南大学出版社、二〇〇七年。一四二頁。